

〈論文〉

村上春樹『ノルウェイの森』論

——「フランス語の動詞表」と「ドイツ語の文法表」をめぐって——

小島基洋

あなたの心に潜むのは 艶やかな仮面舞踏会  
 色とりどりの仮面をつけて リュートを奏で 踊りを踊る  
 だが 幻想的な仮面の下には 哀しみがその影を宿す

—ヴェルレーヌ「月の光」より

最初に出会う言葉であるがゆえに、顧みられることのない一行のエピグラフ。

—多くの祭りフエトのために

二十歳を前後する数年間が艶やかな狂騒の日々であること。それは後から振り返ると「祭り」としか名づけ得ない何かであること。そして『ノルウェイの森』が「多くの祭り」を鮮明かつ甘美に描き出した小説であること。

それは間違いない。

だが、ここに振られたルビ「フエト」—*fêtes*（フランス語）—は何を意味するのだろうか。

この言葉が想起させるのは、フィッツジェラルドの『夜はやさし』(*Tender is the Night*)に付された献辞である。

To

GERALD and SARA

MANY FÊTES

FÊTES—フランス南海岸で過した一九二〇年代の日々をフィッツジェラルドはこう表現した。当時、煌びやかなパーティーの中心にいたのが Gerald Murphy とその妻 Sara である。フィッツジェラルドは二人をモデルに、主人公—精神科医ディック、そして彼の患者であり妻となるニコル—を造形し、舞台を南仏リヴィエラとスイス山中の療養所に置いた。この物語が『ノルウェイの森』の原型にあるのだとすれば、冒頭のエピグラフは、ひとまず『夜はやさし』へのオマージュとして受け取ることが可能だろう。しかし、本当にそれだけなのだろうか。「祭り」に付されたフランス語のルビーフェートーに耳を寄せると、かすかに、死者たちの息遣いが聞こえるのはどうしてなのだろう。

# 一．フランス語を学ぶ直子・ドイツ語を学ぶ「僕」

十七歳で命を絶った親友キズキとその恋人直子。東京の大学に進学した直子と「僕」は、中央線で偶然に再会し、次第にその距離を縮めていく。物語は、直子の二十歳の誕生日に大きく展開する。この夜、「僕」と初めて寝た直子は、深く混乱し、大学を辞めて療養施設に入ることになるのだ。

転換点となった誕生日の明くる朝、背中を向けて眠る直子の傍らで「僕」は彼女の部屋を見渡す。「僕」の視点からの描写は細部にわたる。

床にはレコード・ジャケットやグラスやワインの瓶や灰皿や、そんなものが昨夜のままに残っていた。テーブルの上には形の崩れたケーキが半分残っていた。まるでそこで突然時間の流れが止まって動かなくなってしまうように見えた。僕は床の上にちらばっ

<sup>1</sup> 村上春樹『ノルウェイの森』（講談社 一九八七年）括弧内に上下巻の別、及び頁数を記す。

たものを拾いあつめてかたづけ、流して水を二杯飲んだ。机の上には辞書とフランス語の動詞表があつた。机の前の壁にはカレンダーが貼つてあつた。写真も絵も何もない数字だけのカレンダーだった。カレンダーは真っ白だった。書きこみもなければ、しるしもなかった。(上七五)

「友だちも殆どいない」(上四九)彼女の暮らしぶりを表すカレンダーの描写に比べ、あまりに素っ気無く言及される机上の「フランス語の動詞表」。これは、村上が一貫して描く「仏文科の女の子」―処女作『風の歌を聴け』に登場し、次作『1973年のピンボール』で直子と呼ばれる―をかすかに想起させる事物である<sup>2</sup>。『ノルウェイの森』の直子もまた、彼女たちと同様、独り死の世界に向かうことになる。

しかし、この「フランス語の動詞表」は、本作においては、より重要なアイテムとなっていることに注意しなくてはならない<sup>3</sup>。「フランス語」というモチーフが、新たに「ドイツ語」<sup>4</sup>という対立項を呼び寄せ、両者で物語の象徴レベルを統御する鍵概念となるのだ。生と死の間を揺れ動く『ノルウェイの森』の登場人物たちにとって、「ドイツ」と「フランス」は、生の世界と死の世界を象徴する特別な何かなのである。

直子が京都の療養施設に入つた後で、一度だけフランス語に言及する場面がある。

午後は自由カリキュラムで、自分の好きな講座かあるいは野外作業かスポーツが選べる。彼女はフランス語とか編物とかピアノとか古代史とか、そういう講座をいくつかとっていた。

「ピアノはレイコさんに教わってるの」と直子は言った。「彼女は他にギターも教えてるのよ。私たちみんな生徒になつたり先生になつたりするの。フランス語に堪能な人はフランス語教えるし、社会科の先生してた人は歴史を教えるし、編物の上手な人は編物を教えるし、そういうのだけでもちよつとした学校みたいになつちゃうのよ。…」(上二二七―二二八)

ここでさり気なく告げられているのは、療養所では（多くの医者が得意とするドイツ語ではなく）フランス語が教えられており、大学を辞めた後も直子がフランス語への興味を持ち続けている事実である。

これと対照的なのはドイツ語を学習する「僕」だ。学習態度は極めて真剣である。「僕」は後に恋人となる緑と初めて二人きりで昼食を食べ、日曜に彼女の家を訪問する約束をした際、「そろそろ大学に戻って二時からのドイツ語の授業に出る」（上二一八）と言って別れる。また、彼女の実家を訪問した翌日も「昼休みが終ると僕は図書館に行つてドイツ語の予習を」（上一四六）している。直子を訪ねてから東京に戻り久しぶりに緑に会った時もドイツ語の授業には律儀に出席する。

「ねえワタナベ君、午後の授業あるの？」

「ドイツ語と宗教学」

「それすっぱかせない？」

「ドイツ語の方は無理だね。今日テストがある」（下四〇）

そもそも「僕」はドイツ語のテストを受けるために直子がいる阿美寮から戻ってきたのである。彼は滞在先の療養所でも寸暇を惜しんでドイツ語の勉強をしていた。以下はレイコ（直子と同室の患者）との会話である。

<sup>2</sup> 井上義夫『村上春樹と日本の「記憶」』（新潮社 一九九九年）三三―三五頁。

<sup>3</sup> 『ノルウェイの森』の原型となった短編「蜚」にも、直子の机の上に「フランス語の動詞表」が置かれている（「蜚」三五）。この些細なアイテムが、長編化にあたって機能を劇的に拡張させていったものと考えられる。村上春樹「蜚・納屋を焼く・その他の短編」（新潮社 一九八四年）。

<sup>4</sup> 『ノルウェイの森』の「ドイツ」要素に関しては加藤典洋の言及がある。氏は注の中で、「僕」のハンブルグ空港着、ドイツ語学習、「魔の山」と阿美寮、永沢のドイツ赴任をあげている。『村上春樹イエローページ』（荒地出版社 一九九六年）一一四―一一五頁。しかし一方の「フランス」要素については注目されてこなかったようである。

「…あなたはいままでここにいられるの?」

「明後日の夕方までに東京に戻りたいんです。アルバイトに行かなくちゃいけないし、木曜日にはドイツ語のテストがあるから」  
(上二八一)

「…あなた一人でここで待っていてほしんだけでもいいかしら?」

「いいですよ、ドイツ語の勉強してますから」(上二八七)

「ドイツ語やってますよ」と僕はため息をついて言った。

「いい子ね、お昼前には戻ってくるからちゃんと勉強してるのよ」とレイコさんは言った。そして二人はクスクス笑いながら部屋を出て行った。(上二四五)

「僕」のドイツ語学習への過剰な言及は、直子のささやかなフランス語学習が、読者の記憶から零れ落ちてしまうことへの警鐘のようでもある。直子のフランス語と「僕」のドイツ語、この対比はいったい何を意味するのだろうか。

## 二. 「フランス」における「ドイツ」の拒絶

フランス語とドイツ語という二つの語学は、単なる学習対象ではなく、異なる二つの世界を示す記号なのではないだろうか。それがこの論考の仮説である。

直子が療養所から送ってきた初めての手紙を「僕」が読み終えた時のことである。

僕は机の前に座ってしばらくその封筒を眺めていた。封筒の裏の住所には「阿美寮」と書いてあった。奇妙な名前だった。僕はその名前について五、六分間考えをめぐらせてから、これはたぶんフランス語の *ami*（友だち）からとったものだろうと想像した。

（上一六三）

直子のいる療養所とフランス語の関連性が、「僕」の推測を通して読者に告げられている。その名をフランス語起源とする阿美寮は「フランス」で象徴される何かなのだ。

しかし、その阿美 (*ami*) 寮を訪問する時に、「僕」は執拗にドイツ語の学習をする。直子とレイコが暮らす部屋に残され、ドイツ語の教科書を開いた際の「僕」が抱く感慨は興味深い。

爪を切ってしまうと僕は台所でコーヒーを入れ、テーブルの前に座ってそれを飲みながらドイツ語の教科書を広げた。台所の陽だまりの中でTシャツ一枚になってドイツ語の文法表を片端から暗記していると、何だかふと不思議な気持ちになった。ドイツ語の不規則動詞とこの台所のテーブルはおよそ考えられる限りの遠い距離によって隔てられているような気がしたからだ。（上二四五—二四六）

何故、直子の「台所のテーブル」と、「僕」の暗記している「ドイツ語の不規則動詞」は、「考えられる限りの遠い距離によって隔てられている」のか。この「不思議な」違和感を読み手として論理的に説明する方法はひとつしかない。それは、直子の属する阿美寮が「フランス」だからだ。直子の「テーブル」の上には—かつてのアパートの「机の上」のように—「フランス語の動詞表」があるべきであり、「ドイツ語の文法表」があつてはならないのだ。

「僕」が直子の部屋に持ち込んだ「異物」は「ドイツ語の文法表」だけではない。もう一つの「ドイツ」、それはトーマス・マンの「魔

の山」である。

直子とレイコさんは二人揃って五時半に戻ってきた。僕と直子とはじめて会うときのよういきちんとひととおりあいさつを交した。直子は本当に恥ずかしがっているようだった。レイコさんは僕が読んでいた本に目をとめて何を読んでいるのかと訊いた。トーマス・マンの「魔の山」だと僕は言った。

「なんでこんなところにわざわざそんな本を持ってくるのよ」とレイコさんはあきれたように言ったが、まあ言われてみればそのとおりだった。(上一九一・筆者強調)

レイコは「半年ぶりに恋人に会いにくるのになぜ小説などもってくるのか」と呆れているようだ。しかし、もしそうであれば、「なんでこんなところにわざわざ本を持ってくるのよ」で事足りる。わざわざ「そんな本」と言っているのは、厳密に言えば、「魔の山」のような本」ということである。この場合の第一義的な解釈は、レイコが小説の内容を熟知しており「阿美寮のような療養所に、サナトリウムを訪問する話である『魔の山』なんて」とたしなめているというものであるのかもしれない。だが、同時に「フランス」―阿美寮―に持ち込まれた「ドイツ」―『魔の山』―の異物性を印象付ける表現でもあるのだ<sup>5</sup>。

「僕」が持ち込んだドイツ語学習とドイツ文学の「魔の山」。しかし、その二つをめぐる会話の相手が、実はすべてレイコだったことを見過ごしてはならない。直子は、たとえその場にいても、やり取りには直接関わっていない。まるで彼女には「ドイツ」関連のものが感じできないかのようだ。阿美寮での滞在二日目の夜のことである。

僕は上手く眠れなかったのでナップザックの中から懐中電灯と「魔の山」を出してずっと読んでいた。十二時少し前に寝室のドアがそっと開いて直子が僕のとなりにもぐりこんだ。昨夜とはちがつて直子はいつもと同じ直子だった。目もぼんやりとしていなかったし、動作もきびきびしていた。彼女は僕の耳に口を寄せて「眠れないのよ、なんだか」と小さな声で言った。僕も同じだと僕は言っ



た。僕は本を置いて懐中電灯を消し、直子を抱き寄せて口づけした。闇と雨音がやわらかく僕らをくるんでいた。(下三〇)

「魔の山」を読んでいる「僕」のベッドに直子もぐりこんでくる。「僕」は本を閉じて明かりを消す。直子は本の存在を気にする様子はないようだ。

しかし、だからと言って彼女が本そのものに興味がないというわけでもない。この日の就寝前、「僕」がレイコさんと外出していた際には彼女自身「ソファア」に座って本を読んでいるし(下二八)、前日には「僕」に借りた本に言及しさえしている。

「ねえ、自分のことを普通の人間だという人間を信用しちゃいけないと書いていたのはあなたの大好きなスコット・フィッツジェラルドじゃなかったかしら？ あの本、私あなたに借りて読んだのよ」(上二〇一)

直子はフィッツジェラルドのようなアメリカ人作家の名前には触れても、目の前で「僕」が読んでいるドイツ人作家の本には一切の言及をしない。阿美寮に入った後、ドイツ語世界は一切彼女の世界から消えてしまうのである。「ドイツ」が象徴しているものは、「僕」が頑なに固執し、直子が頑なに拒絶する何かなのだろう。

### 三、「ドイツ」行きの挫折・「フランス」での死

直子は必ずしも「ドイツ」世界と無縁だったわけではない。彼女のドイツ的なものへの嗜好が一度だけ登場する。彼女が阿美寮に入る

<sup>5</sup> 加藤典洋は「魔の山」を媒介に「ドイツ」と阿美寮を結び付けて論じている。「まさか」と「やれやれ」【村上春樹論集①】(若草書房 二〇〇六年) 一三七頁。これに対し、本論では「魔の山」を「フランス」阿美寮に持ち込まれた「異物」とであるととらえる。

前のことである。

一月の末に突撃隊が四十度近い熱を出して寝こんだ。おかげで僕は直子とのデートをすっぱかしてしまふことになった。僕はあるコンサートの招待券を苦勞して手に入れて、直子をそれに誘ったのだ。オーケストラは直子の好きなブラームスの四番のシンフォニーを演奏することになっていて、彼女はそれを楽しみにしていた。(上六七)。

直子はドイツ人作曲家ブラームスが(あるいは特に交響曲第四番が)「好き」なのだ。しかし、このコンサートには結局行くことができず、三ヶ月後に二十歳を迎えた彼女は阿美寮に入ることとなる。それ以降の直子は、上述した通り、「ドイツ」的世界への関与が一切なくなってしまう。

一方、「フランス」的世界—阿美寮—の住人レイコもドイツと浅からぬ縁があった。

「私若いころね、プロのピアニストになるつもりだったのよ。…卒業したらドイツに留学するって話もだいたいわかってたしね。…」(上二二三)

しかし、直子と同様、その志向は挫折することになる。レイコはある日突然、指が動かなくなりドイツへの留学をあきらめる。やがて精神に失調をきたし始め、結局は「睡眠薬飲んでガスひねっ」て(下二二六)、阿美寮に入る。「『ドイツ』行きの挫折」—それが「フランス」世界である阿美寮に入るきっかけとなるのである。

だが、阿美寮に入った後も、レイコの音楽への趣味は、直子と違い、ドイツ的なものが多い。「僕」と直子が散歩から帰ってくると、彼女はブラームスを聞いている。

我々がコーヒー・ハウスに戻ったのは三時少し前だった。レイコさんは本を読みながらFM放送でブラームスの二番のピアノ協奏曲を聴いていた。見わたす限り人影のない草原の端っこでブラームスがかかっているというのなかなか素敵だった。三楽章のチェロの出だしのメロディーを彼女は口笛でなぞっていた。

「バックハウスとベーム」とレイコさんは言った。「昔はこのレコードをすりきれくらい聴いたわ。本当にすりきれちゃったのよ。隅から隅まで聞いたの。なめつくすようにね」

僕と直子はコーヒーを注文した。

「お話はできた？」とレイコさんが直子に訊ねた。

「ええ、すごくたくさん」(上二六六)

ここではレイコのブラームスへの愛が饒舌に語られる。しかし、ブラームスを「好き」だったはずの直子がレイコの話に反応した様子はない。別の問いかけへの即座の返答は、直子の「ドイツ」世界への沈黙を一層際立たせている。

レイコが「ドイツ」世界に傾けた情熱を現在も保持しているのに対して、直子は最早「ドイツ」世界を感知せず、「フランス」世界にだけしか反応しなくなっているようである。次の場面も象徴的だ。

<sup>6</sup> 「僕」のルームメートが熱を出して招待券がふいになるというエピソードは「蜚」にもあるが(「蜚」三〇—三二)、何のコンサートだったのかについての言及はない。ブラームスのチケットであるというのは、「ノルウェイの森」執筆段階での加筆である。ちなみに、「蜚」において「同居人」と名指されていた彼のことを「ナチだとか突撃隊だとか」(上二六) 周囲が呼ぶようになるのも「ノルウェイの森」においてである。「突撃隊」は、六月に「クラスの女の子」とデートするもののうまいかず(上五〇—五二)、翌月、帰省したまま二度と戻ることはない。「突撃隊」の話を聞きたがっていた(上五〇) 直子は、二十歳の誕生日にも「その人に会ってみたいわ、私。一度でいいから」と述べるが、結局実現しない。「僕」の阿美寮訪問時には彼は行方不明になっており、次第に話題にすら上らなくなる。「突撃隊がいてくれたらなあ」と僕は残念に思った。あいつさえいれば次々にエピソードが生まれ、そしてその話さえしていればみんなが楽しい気持ちになれるのに、と。(上二三五)。「ドイツ」—突撃隊と「フランス」—阿美寮は相容れないのだ。

彼女はもう一曲バッハの小品を弾いた。組曲の中の何かだ。ロウソクの火を眺め、ワインを飲みながらレイコさんの弾くバッハに耳を傾けていると、知らず知らずのうちに気持ちがいそいそで来た。バッハが終ると、直子はレイコさんにビートルズのものを弾いてほしいと頼んだ。

「リクエスト・タイム」とレイコさんは片目を細めて僕に言った。「直子が来てから私は来る日も来る日もビートルズのものばかり弾かされているのよ。まるで哀れな音楽奴隷のように」

彼女はそう言いながら「ミシェル」をとてもし上手に弾いた。

「良い曲ね。私、これ大好きよ」とレイコさんは言いつてワインをひとくち飲み、煙草を吸った。「まるで広い草原に雨がやさしく降っているような曲」

それから彼女は「ノーホエア・マン」を弾き、「ジュリア」を弾いた。ときどきギターを弾きながら目を閉じて首を振った。そしてまたワインを飲み、煙草を吸った。

「『ノルウェイの森』を弾いて」と直子が言った。(上一九七—一九八)

レイコはいつものように(ドイツ人作曲家)バッハを弾く。それを聞いた「僕」は「気持ちがやすらいで」くるが、直子の感想はやはり一言もない。彼女はただ「バッハが終ると」ビートルズをリクエストする。それに応えたレイコが最初に弾く「ミシェル」は直子の純粋な「フランス」的世界を象徴するのにふさわしい。

Michelle, ma belle

Sont des mots qui vont très bien ensemble

Très bien ensemble

ビートルズの中でも、唯一フランス語が歌詞に登場する曲である。

「ミシエル」は、実は「ノルウェイの森」と同じくらい重要な曲なのかもしれない<sup>8</sup>。翌年、症状が悪化した直子は東京の病院で検査を受け、死を心に決めて阿美寮に戻ってくる。その夜―人生最後の夜―直子が聞いた曲は、彼女を「深い森の中で迷っているような気」に（上二九八）させる曲、「ノルウェイの森」。そしてもう一曲は―レイコによって「広い草原に雨がやさしく降っているような曲」と形容された―「ミシエル」なのである。その時のことは、彼女の死後、東京にやってきたレイコの口から語られることとなる。

それから私たちいつものように食堂で夕ごはん食べて、お風呂入って、それからとっておきの上等のワインあけて二人で飲んで、私がギター弾いたの。例によってビートルズ。『ノルウェイの森』とか『ミシエル』とか、あの子の好きなやつ。（下二三九）

直子はギターの残響と共に、夜明け前の「広い草原」を通りぬけ「深い森」に入る。後に残したのはたった一枚のメモ用紙だった。

六時に目を覚ましたとき彼女はもういなかったの。寝巻が脱ぎ捨ててあって、服と運動靴と、それからいつも枕もとに置いてある懐中電灯がなくなっていたの。まずいなって私そのとき思ったわよ。だってそうでしょ、懐中電灯持って出ていったってことは暗いうちにここを出ていったっていうことですものね。そして念のために机の上なんかを見てみたら、そのメモ用紙があったのよ。『洋服は全部レイコさんにあげてください』って。（下二四二）

<sup>7</sup> 『ビートルズ全詩集』内田久美子訳（ソニー・ミュージック・パブリッシング 二〇〇三年）一四二―一四五頁。フランス人の娘ミシエルにつたないフランス語を使って想いを伝えようとするイギリス人の男の子が歌詞の主体である。

<sup>8</sup> 本文中で使われるビートルズの楽曲の中でも「ミシエル」はあまり注目されていないようである。たとえば田中勸儀は「ノルウェイの森」「エリナ・リグビー」「ノーホエア・マン」についてその意義を説明しているが、なぜか「ミシエル」には言及していない。「ノルウェイの森」―現実と他界の間で―『國文學 解釈と教材の研究』（學燈社 一九九九年三月号）八一頁。

彼女が残した唯一の「遺書らしきもの」(下二四三)が、かつて「フランス語の動詞表」があつた場所——「机の上」——で発見されたのは偶然ではないだろう。あの日、机の上に置かれていた「フランス語の動詞表」は、やはり死の道標だったのだ。

直子の死後、レイコは「僕」の下宿にギターを持参して現れ、直子へのレクイエムを奏でる。

それからレイコさんはギター用に編曲されたラヴェルの「死せる王女のためのパヴァーヌ」とドビュッシーの「月の光」を丁寧に弾いた。「この二曲は直子が死んだあとでマスターしたのよ」とレイコさんは言った。「あの子の音楽の好みは最後までセンチメンタリズムという地平をはなれなかったわね」(下二五一)

直子の音楽の趣味がセンチメンタリズムに規定されていた(ように見えた)のは、あるいは内なる「ドイツ」を喪失していた結果だったのかもしれない。レイコは二人のフランス人作曲家——ラヴェルとドビュッシー——のどこまでも甘美な旋律を奏でて「死せる王女」直子を葬送するのだ。

ドビュッシーの「月の光」は、ヴェルレーヌの詩集『艶なる宴』(*Fêtes Galantes*)の一編“Clair de Lune”をピアノ曲にしたものであったことを想起しておいてもよい。

しかし今僕の前にいる直子の体はそととはがらりと違っていた。直子の肉体はいくつかの変遷を経た末に、こうして今完全な肉体となって月の光の中に生れ落ちたのだ、と僕は思った。(上三三九)

二十歳のある夜、「月の光」の中で「完全な肉体」を有した直子。彼女の艶なる宴(*une fête galante*)——「祭り」——は、こうして静かに幕を閉じる。

#### 四、「ドイツ」に辿り着かなかった者たち

最後に、他の登場人物たちの行く末―「多くの祭り」(many fêtes)―にも触れておこう。

「僕」が最終的に選んだのは緑である。死の世界にいた直子と対照的な緑は「春を迎えて世界にとびだしたばかりの小動物のように瑞々しい生命感を体中からほとばしらせていた」(上九三) 女性である。彼女はまたもう一人のドイツ語学習者であった。

「学校が死ぬほど嫌いだったからよ。だから一度も休まなかったの。負けるものかと思ってたの。…それで無遅刻無欠席の表彰状とフランス語の辞書をもらったの。だからこそ私、大学でドイツ語をとったのよ。だってあの学校に思なんか着せられちゃたまらないもの。そんなの冗談じゃないわよ」(上一一一)

皆勤賞の賞品が「フランス語の辞書」であったことが示唆するように、緑が通った「エリート」の女の子が集まる「女子高校ではフランス語教育が行われていたのだらう」<sup>10</sup>。そんな彼女がドイツ語を選択したのは、フランス語への強い拒絶の結果である。物語の象徴レベル

<sup>9</sup> 「1973年のピンボール」(講談社文庫 一九八三年)において、二十一歳で自殺する直子の父親は仏文学者である。「彼はその分野では少しは名を知られた仏文学者であつたらしいが、直子が小学校にあがるころに突然大学の職を辞し、それ以来気の向くままに不可思議な古い書物を翻訳するといった気楽な生活を送りつづけていた。堕天使や破戒僧、悪魔祓い、吸血鬼といった類の書物だ。」(一九) 村上の中では、直子―フランス語(文学)―闇の世界というイメージが連鎖しているのかもしれない。

<sup>10</sup> 緑が通っていた「四ツ谷の駅からしばらく歩いたところにある」(上一〇八) 高校は雙葉学園であると想定される。カトリック教育を基本とするためフランス語教育が盛んな学校である。

では、彼女はこの段階で「フランス」的死の世界を拒否し、「ドイツ」的生の世界を志向したのだと言える。熱心に勉強している様子はないが、友達とおしゃべりで「昨年のドイツ語の成績」(下一八五)を話題にしていたりする。緑は、死の世界「フランス」を脱出し、生を志向する「ドイツ」を目指す女性なのだ。小説の最終頁で「僕」が「世界中に君以外に求めるものは何もない」(下二五八)と告白する相手が、「フランス」を志向する直子ではなく、自分と同じ「ドイツ」を志向する緑であったのは必然であるのかもしれない。

しかし、その後二人はどうなったのだろうか。われわれ読者が知ることができるのは三十七歳になった「僕」の姿のみである。「僕」の過剰な「ドイツ」志向は、やがて「僕」を地理上のドイツに連れて行く。ここで小説の冒頭に戻る。

僕は三十七歳で、そのとき747のシートに座っていた。その巨大な飛行機は分厚い雨雲をくぐり抜けて降下し、ハンブルク空港に着陸しようとしているところだった。十一月の冷やかな雨が大地を暗く染め、雨合羽を着た整備工たちや、のっぺりとした空港ビルの上に立った旗や、BMWの広告板やそんな何もかもをフランドル派の陰うつな絵の背景のように見せていた。やれやれ、またドイツか、と僕は思った。(上五)

「僕」はとにかく(何度目かの)ドイツに辿り着いている。だが、緑はどこに行ってしまったのだろうか。飛行機が着陸態勢に入った時に流れ出した「ノルウェイの森」を聞いて動揺する僕に客室乗務員が声をかける。

前と同じスチュワーデスがやってきて、僕の隣に腰を下ろし、もう大丈夫かと訊ねた。

「大丈夫です、ありがとうございます。ちょっと哀しくなったただだから (It's all right now, thank you. I only felt lonely, you know.)」と僕は言  
って微笑んだ。(上六)

「僕」はここで「哀しくなった」と言う。しかし、「僕」は直子を失った哀しみを訴えているだけではない。実際に口に出した“lonely”



という単語が示唆するのは「僕」が一人きりだということである<sup>11</sup>。もしも「僕」と結婚していたら、緑がいたはずの場所にスチュワ―デスが「腰を下ろす」。「僕」の隣の空席は、単に緑の一次的不在を暗示するだけなのだろうか。

実は、緑と「ドイツ」の関係性には興味深いエピソードが存在する。「僕」は緑の実家、小林書店に泊まりに行った時、眠れない夜をやり過ごすため、店に下りて本を拝借する。

しかしとにかく何か読むものがあつたので、長いあいだ売れ残っていたらしく背表紙の変色したヘルマン・ヘッセの「車輪の下」を選び、その分の金をレジスターのわきに置いた。少なくともこれで小林書店の在庫は少し減ったことになる。

僕はビールを飲みながら、台所のテーブルに向って「車輪の下」を読み続けた。(下―一五三)

『戦争と平和』もないし、『性的人間』もないし、『ライ麦畑』もない(上―一三) 小林書店にもなぜか「車輪の下」は存在している。かつて阿美寮を訪問した際、直子の部屋の「台所のテーブル」で「ドイツ語の文法表」を広げたように、「僕」は緑の家の「台所のテーブル」で、ドイツ人作家ヘッセの「車輪の下」を読む。しかし、「ドイツ」を象徴するヘッセの文庫本は「僕」によって外部にもちだされ、やがて、書店そのものも彼女の父の死によって売り払われることになる。

このエピソードにある「ドイツ」の喪失は、十七年後の緑のドイツにおける不在を予見しているのかもしれない。「僕」と一緒にドイツに来ることができなかった彼女は、やはりどこかで死の世界―「フランス」―に引き戻されてしまったのだろうか。

この物語には、もう一人ドイツに辿り着けなかった人物がいる。彼女もまた生の世界から死の世界へと旅立つ。その彼女とは「僕」の「少年期の憧憬」(下―一六)を体現するハツミである。ハツミは「僕」と同じ寮に住んでいた二年上級の永沢の恋人であった。スペイン

<sup>11</sup> 吉田春生『村上春樹、転換する』(彩流社 一九九七年) 九七頁。

語講座を見終わった後で、「英語とドイツ語とフランス語はできあがつてるし、イタリア語もだいたいできる」(下一〇〇)と語っていた永沢は、外交官として世界中に赴任する可能性があった。しかし結局、彼が赴任したのはドイツである<sup>12</sup>。そのことはハツミが自殺した事実と共に読者に知らされることになる。

でも永沢さんにも僕にも彼女を救うことはできなかった。ハツミさんは——多くの僕の知り合いがそうしたように——人生のある段階が来ると、ふと思いついたみたいに自らの生命を絶った。彼女は永沢さんがドイツに行ってしまった二年後に他の男と結婚し、その二年後に剃刀で手首を切った。

彼女の死を僕に知らせてくれたのはもちろん永沢さんだった。彼はボンから手紙を書いてきた。「ハツミの死によつて何かが消えてしまったし、それはたまらなく哀しく辛いことだ。この僕にとつてさえも」僕はその手紙を破り捨て、もう二度と彼には手紙を書かなかった。(下一一六——一二七)

「僕」が突然「哀しく」なったのがハンブルグ空港であつたように、永沢が「哀し」みを訴えているのは、奇しくも西ドイツの首都ボンである。ハツミもまた彼のもとを離れ、そして命を絶った。「結婚して、好きな人に毎晩抱かれて、子供を産めればそれでいい」(下一四一)と語つた彼女は、もしも永沢と結婚していれば、外交官夫人として共にドイツにいたはずだ。しかし、直子がブラームスを聞きに行けなかったように、そしてレイコがドイツ留学に行けなかったように、ハツミもドイツに赴任する永沢について行けない。その結果、ハツミも二人と同様、自殺を試み、自らの人生に自らの手で終止符を打つのだ。

レイコはその後どうなったのだろう。「フランス」世界である阿美寮を出て上京した彼女には、不吉にも、死に向かう直子の像が丁寧に重ねられている。レイコは直子の服を着て「僕」のもとに現れ、直子のように「僕」と寝る。そして、行き先としてあげるのは「作りそこねた落とし穴みたいな」(下一三〇) 旭川である。この比喩は、「僕」がハンブルグ空港で思い出すことになる「野井戸」を想起させ

る。直子は、森の中で井戸に落ち「一人ぼっちでじわじわと死んでいく」、そんな「ひどい死に方」(上二二)について「僕」に切々と語った。そしてレイコは、その時の直子の台詞「本当にいつまでも私のことを忘れないでいてくれる？」(上一七)を律儀に反復し、上野駅を発つ。

「私のこと忘れないでね」

「忘れませんよ、ずっと」

「あなたと会うことは二度とないかもしれないけれど、私どこに行ってもあなたと直子のこといつまでも覚えているわよ」

僕はレイコさんの目を見た。彼女は泣いていた。僕は思わず彼女に口づけした。まわりを通りすぎる人たちは僕たちのことをじろじろ見ていたけれど、僕にはもうそんなことは気にならなかった。我々は生きてきたし、生き続けることだけを考えなくてはならなかったのだ。(下二五七)

レイコは本当に「生き続けることだけを考え」ていくことができるだろうか。読者の耳には「僕」の下宿で行った二人きりの「寂しくない」「直子のお葬式」のメロディーが残る。

<sup>12</sup> 永沢と「僕」を結びつけたのはフィッツジェラルドの『グレイト・ギャッツビー』であった。「グレイト・ギャッツビー」を三回読む男なら俺と友だちになれそうだな(上五七)。ギャッツビーもまた「フランス」と「ドイツ」の間を彷徨った人物の一人なのかもしれない。初恋の相手デイジーと恋仲になりながらも、第一次世界大戦でフランスに送られた彼は、アルゴンヌの戦場で戦功をあげて前線から退く。いわば死の世界「フランス」から生還したのだ。しかし、米国になかなか帰れないでいるうちに、デイジーは他の男と結婚してしまう。物語は帰国後の彼がデイジーを取り戻そうとする破滅的ロマンティズムを中心に展開する。職業から経歴、出自にいたるまで虚偽でかためた主人公ギャッツビーの周囲では、なぜか彼がドイツ系であるという噂がたえない。「ドイツのスパイだった」「ドイツと一緒に育った」(八五)、あるいは、「ヴァイルヘルム皇帝の甥だとか従兄弟」(六五)、「ヒンデンブルクの甥」(一一五)、などとささやかれている。しかし彼もまた結局、最愛の恋人デイジーに裏切られ、独り破滅へと向かうことになる。スコット・フィッツジェラルド『グレイト・ギャッツビー』村上春樹訳(中央公論社 二〇〇六年)。

レイコさんは四十九曲目に『エリナ・リグビー』を弾き、五十曲目にもう一度『ノルウェイの森』を弾いた。五十曲弾いてしまうとレイコさんは手を休め、ウイスキーを飲んだ。「これくらいやれば十分じゃないかしら？」

「十分です」と僕は言った。「たいしたもんです」

「いい、ワタナベ君、もう寂しいお葬式のことはいさっぱり忘れなさい」とレイコさんは僕の目をじっと見て言った。「このお葬式のことだけを覚えていなさい。素敵だったでしょ？」

僕は肯いた。

「おまけ」とレイコさんは言った。そして五十一曲目にいつものバッハのフーガを弾いた。(下二五二)

直子への鎮魂歌『ノルウェイの森』の後で、レイコは自分のために「バッハ」を弾く。そのためドイツへの志向は、うまくいけば彼女を旭川経由で「ドイツ」——生の世界——に導いていくのかもしれない。五十六歳となった彼女は今どうしているのだろう。

「フランス語の動詞表」は二十一歳の直子を死に誘い、「ドイツ語の文法表」は三十七歳の「僕」をハンブルグに着地させる。『ノルウェイの森』における「フランス」と「ドイツ」——それはおそらく、「仏」と「独」の謂なのだろう。「フランス」に留まる者は死の世界に魅せられ、生き残る者だけが孤独を抱えて「ドイツ」に辿り着くのだ。

やれやれ、またドイツか、と僕は思った。(上五)

独り生きることの倦怠——『ノルウェイの森』がどことなく哀しいのは、作品冒頭に置かれたこの何気ない呟きのせいだ。愛しき者を喪った「僕」にできるのは、「多くの祭り」<sup>フェスト</sup>を反芻することしかない。その克明な記録が『ノルウェイの森』なのである。